

私の山村湖四郎先生

三中34回 浅野 修

旧臘二十二日、松本市村井の山村湖四郎先生の実家を墓参のため訪れました。前日連絡のため電話した時の嗣子泰彦氏の声が、湖四郎先生そっくりなのに驚きましたが、当日お会いしたらお顔まで我々が授業を受けた当時の先生に、大変よく似て居られたので二度ビックリしました。

お宅に近い山村家一族の墓域は落葉した明るい疎林の中にありました。泰彦氏の案内で湖四郎先生の墓前に立った時、「先生またやってきましたよ」とはからずも語りかけたい衝動にかられました。

昭和二十二年の初秋、学生の気楽さからあの食糧難の中を友人と無謀なアルプス登山を試みようと、途中御迷惑も考えず先生のお家に立寄ったのです。当時何を話したか覚えていませんが、先生は温かく迎え入れてうんうんとこちらの話を聞いて下さった上、気をつけて行くようにさとされて門口まで見送って

くございました。別れ際にはをと言つてぬくもりのあるお好み焼のようなものを渡されました。あの時分の食べるものがなくて飢餓状態に近い我々にはどれだけうれしかった事か、今でもその温もりが掌に残っています。そして更に先生に語りかけたかったのは「このように元気になりましたよ」と自分の健康の恢復を報告したかったからです。昭和五十一年以来私は脊髄炎を病み五十三年から三年間は天井を向いたまま終日全身の疼痛と脱力倦怠に襲われる寝た切りの生活を余儀なくされていました。五十六年五月漢方治療で恢方の兆しが見え、やっと床の上に坐る事ができるようになった丁度その時、山村先生がわが陋屋の急な階段をおぼつかない足どりでヨチヨチ登つて来て枕頭に立たれたのです「あんたが病氣だと聞いてどんなだかと思つてやつて来たんだよ」とお土産を差し出された時私は思わず目頭が熱くなりました。

中学時代の一劣等生を覚えて頂いているだけでも光栄なのに同窓会の途次とは申せ、既に不自由になり勝ちな体をわざわざお見舞い下さつてどんなに感激した事でしたか。墓前に合掌した時、葬儀に参列出来なかったお詫びより「元気になりました」の一言が言いたかったのです。

私は昭和十三年四月京都三中に入学しました。一年乙組に配属された時の担任の先生が山村先生でした。不安と緊張でコチ

コチになつてゐる我々の前に先生が立たれた時、私はなんとなくホツとしました。恐らく級友の全員がそうだったのではないでしょう。色の白いヒヨロヒヨロの先生を見た時、「これは組しやすい」と思ったのは私だけではありません。少しもいかめしさの無い、何処か剽軽さのある教師らしからぬ教師に、安心といささかの軽視を覚えたのは事実です。称して渾名が「ジャマ」とついたのはこのニュアンスを表しているのではないでしょう。そして授業が始まると、これまた英語授業そっちのけで脱線また脱線、ブルターク英雄伝に始まり信長、秀吉、……と止まる所を知らず、口角泡を飛ばして語られるのです。生徒の中にはわざと半畳を入れる者があるのですが、そんな時先生は俄然として益々熱弁を振るわれるのです。もはや先生と生徒の関係と言うより、語っている人物そのものになり切って信念を持つて相手を説得されているようにすら見受けられます。そしてヒヨイと時計を見て時間が無いのに気付いた先生はリーダーを一気に読んで自分で訳して授業が了ると云う寸法です。あとで我々悪童は「ジャマはんうまいこと脱線してくれよったな!!」とお互いに安堵の祝福を挙げたものです。然し先生がこのような余談で授業を潰して居られるとは、生徒の誰一人として思つた事はないでしょう。むしろ真剣に生徒に語りかけようとする先生の熱情に打たれた人の方が多かったと思います。また

生徒を教育し指導する点ではしつかりと眼を据えておられていたように思います。私と仲良く一緒に通学していたS君が今で言う「イジメ」に某君から逢って登校拒否をした時、先生は実に適切な指導処置をされたと思います。私の説明を聞いてから一週間もするとS君は再び明るく元気に登校し、某君も普通に授業を受け、クラスの誰一人として噂する事なく済んでしまっただけです。

今から思うと、日支事変が愈々深まり行き、時勢がおかしくなっていくのを先生なりに心配して居られたと思います。「サーベルさげてなんだかガチャガチャ言っている人が居ますがね」なんて軍事教官への痛烈な批判でしょうし、英米敵視の時代を反映して生徒も英語を軽んじる時代でしたから「諸君はこんな時だから英語をバカにしているようだが、諸君は英語でキツと泣く時が来ますよ」と言われたのは全く適中した言葉でした。戦後の英米文献の流入、学術論文提出に当たったの英文抄録の添付等、痛い程先生の警告を知らされた事はありません。しかし当時の軍国調に氣負った教師が増えつつあった時に、あの飄々とした態度は一体どう言う感懐だったのでしょうか。ヒョットすると早期から先生はあの透徹した洞察力で、日本の敗戦を予期されていた態度だったのでしょうか。

墓参よりの帰りがけに泰彦氏より主宰されていた短歌誌「朝

霧」十二月号と「朝霧の栞」を、また愛子未亡人より先生の歌集「柊の花」を贈られました。車中、栞を読んでグングン引込まれる様な気持ちになり、『柊の花』を詠むに至って、しまつたと悔やみとも驚きとも言われぬ感懐に襲われました。なんだかうつとらしい壁に囲まれていたのに突然ポツカリ穴があいて、今まで見た事のない世界が開けたような気がしました。今まで私は歌の世界なんて全く別の世界で、暇な言葉の遊戯をしているのだとおもっていたのです。

所が先生の歌集を聞くに及んで全く悔し涙が流れそうになりました。それからの数日間はこの歌集を持ち歩き、最終の頁の来るのを恐れるように、それこそソーツとおそろのおそろ詠んで行きました。一瞬静寂が訪れて、深い渓谷に分け入って滾々と流れ出る清冽な谷間の水を見る様な透徹した美しい先生の想いを汲む事が出来たからです。先生が歌を詠まれるとは聞いていました、凡そ歌心を抱いた事のない私には到底想像の及ばない世界でしたが。今こうして先生の歌集に接して、旧師が如何に清冽な想いの人であつたかを知りました。

劣等生乍ら山村先生を数ある教師の中からなんとなく親しみを感じ忘れ難く感じさせていたものは、先生のこの美しい詩人の心であつたと言う事を今回の墓参が奇縁となつて今更乍ら始めて気付いた次第です。